
恋詠花

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋詠花

【Nコード】

N0649BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

アイシャは大国トウルティエールの王妹で可憐な姫君。だが兄王にただならぬ憎しみを向けられて、王宮で非常に肩身の狭い思いをしていた。

そんな折、兄王から小国ハーメイの王に嫁げと命じられたアイシャはおとなしくそれに従う。しかし、そんな彼女を待っていたのは、手つかずのお飾りの王妃という屈辱的な仕打ちだった。それは彼女の出自にも関係していて……？

これは後の世で吟遊詩人に詠われる二人の王と一人の姫君の恋

01 下賤の姫

オルデリード大陸第二の大国、トウルティエール。

この国はまだ二十歳そこそこの若い王が統治している。

名をルドガーと言い、典型的なトウルティエール王族の特徴である白金の髪と青灰色の瞳をしていた。

そして、その彼にはこの国の王族ではあり得ない灰桜色の真っ直ぐな長い髪に胡桃色の瞳を持つ妹姫がいた。

「アイシャ様、陛下がお呼びでございます」

やや年かさの侍女であるライサが知らせてきたのを受けて、アイシャは少々慌てる。

兄王とは折り合いが悪く、普段アイシャは彼にないものとして扱われていた。

それが、今回の唐突な呼び出しだ。

ルドガーには意図があるのだろうが、アイシャはそれがなにかも想像がつかない。

「まあ、陛下がお呼びだなんてなにかしら……？　良いことであればいいのだけれど」

それでも久しぶりの兄王との対面にアイシャは心を浮き立たせていた。

ルドガーとの折り合いは悪いが、アイシャは決して兄王を嫌っているわけではなかった。

「アイシャ様、陛下の御前に出られるのですから、その前に髪を少し結いましょう」

「あ、そうね。衣装はこれでいいかしら？」

ライサの言葉にアイシャは素直に頷くと、自らを見下ろした。

今日のアイシャは象牙色のやや控えめな意匠のものを身につけていたが、これは髪型でそれなりに華やかになるだろう。

美しい灰桜色のアイシャの髪は結わずにいても充分見事ではあったのだが、ただでさえアイシャに厳しいルドガーの前に出るのにそれでは体裁が悪いだろうとライサは考えたのだ。

「はい、よろしいと思いますよ。それでは、姫様こちらへ」

ライサに導かれて、アイシャは衣装部屋の鏡台の前に座った。

ライサに髪を丁寧にブラシでかけられると、アイシャの髪はより美しい艶やかさを醸し出した。

「本当に素敵な御髪ですわ、アイシャ様」

「……ありがとう」

大事にしている髪をライサに褒められたのと、久しぶりに兄王に会える嬉しさで、アイシャは頬を綻ばした。

ライサはアイシャの両方の横の髪を結うと、そこを白い咲きかけの薔薇と白い小花で飾る。

そうすると、アイシャの可憐さがより引き立ち、まるで妖精のように見えた。

「さあ、出来ましたわ。それでは陛下の元へご案内します」

「ええ」

大きな姿見で自分の姿を確認していたアイシャがそれに微笑んで答えた。

これなら、きっとあの方もみすばらしいとはおっしゃらないわ。

ルドガーにいつも厳しい言葉ばかりかけられているアイシャもこの支度の出来映えに満足して、ライサの先導でルドガーが待つ謁見の間へ向かった。

その謁見の間の玉座には、ルドガーが肘をついてなにかを考え込むようにして座っていた。

「お呼びでございますか、陛下」

アイシヤは兄王の前で姫君らしく正式な礼をする。

可憐なその様子をつまらなそうに見やりながら、ルドガーは早々に話を切りだした。

「……この度、おまえの婚礼の話がまとまった」

控えめにたたずんでいたアイシヤはその言葉に衝撃を受けたようにルドガーの顔を見返した。

「わ、わたくしの婚礼でございますか……？」

王妹たるもの、いつかは来る話だとアイシヤも思っていた。

ただ、それがこんな急に訪れるものだとは思ってもいなかった。

「おまえの嫁ぎ先はハーメイだ。下賤の出のおまえが小国とはいえ、国王の正妃となれるのだ。ありがたく思うのだな、アイシヤ」

ルドガーがアイシヤを下賤の出と言ったのには訳があった。

彼女は先王の第二王妃の娘だが、先王とは血の繋がりのない姫だったのだ。

つまり、ルドガーとアイシヤは兄と妹という関係ではあるが、まったくの赤の他人だった。

そして、彼とアイシヤが折り合いが悪いのもこれに起因していた。

「……ハーメイ……」

わたしがハーメイの王妃に。

確かにわたしの出自から考えたら、これほどの良い話はないのか

もしないわ。

それでも突然訪れた自分の婚姻話に、アイシャはうろたえてしま
う。

下賤の者と蔑まれても、まだアイシャはこのトウルティエル王
宮に身を置いていたかったのだ。

「これで賤しいおまえと縁が切れると思うと清々するな。……ただ、
おまえはこの大国トウルティエールの王妹として嫁ぐのだ。このわ
たしに恥をかかせる真似だけはするな」

「は、はい」

ルドガーの辛辣な言葉にアイシャの身が震える。

アイシャは泣くまいと思ったが、その瞳には既に涙が浮かんでい
た。

優しい言葉など望めるはずもなかった。

しかし、アイシャはどうしても彼にそれを期待してしまうのをや
められなかった。

……だが、空しいその時はもう終わりを告げるのだ。

自分がこの王宮から出てしまえば、彼とはもう二度と会うことは
ないのだから。

「……泣いて同情を誘うつもりか。おまえは本当に浅ましい女だな」
ルドガーが心底嫌そうに言う。

すると、アイシャの頬を涙が伝っていった。

陛下は本当に優しくないとアイシャは思う。

けれど、それは仕方のないことなのだ。

わたし達が彼から奪ってしまったものはとてつもなく大きい。

「わたしの前で泣くな。鬱陶しい」

「は……い、申し訳、ございませ……」

ルドガーの叱責に涙を止められなくなったアイシャをかばうようにしてライサがその前に立った。

「御前失礼いたします。陛下、アイシャ様はもう下がられてよろしいでしょうか？ 姫様はお話ができる状態ではございませんし」

「ラ、イサ……」

アイシャがただ一人信頼のおける侍女の名前を呼ぶと、ルドガーは忌々しそうに顔をしかめた。

「いや、いい。もう話は済んだ。わたしがここを出ていく。ライサ、その鬱陶しい女をどうにかしろ」

「……かしこまりました」

ライサが頭を下げると、ルドガーは玉座から立ち上がりその場を去った。

ライサから手巾ハンカチを渡され、アイシャは涙を拭くと大きく息をついた。

「……ライサ、ごめんなさい。こんなふうに取り乱してしまって」

「アイシャ様は気になさらなくてよろしいですよ。……それにしても、急なお話でしたわね」

「ええ……」

安心させるかのように優しく語りかけるライサに幾分落ち着いたアイシャは頷いた。

確かに急な話だった。

王族と名乗ることすらおこがましいと自分でも思っていたアイシャは、いずれはこの国の貴族にでも降嫁することになると思っていた。しかし、それがまさか隣国の王の花嫁とは。

「でも、これもよい機会かもしれませんわ。アイシャ様はこれまでのことはお忘れになって、ハーメイの国王様とお幸せになられるとよろしいのです」

「……ええ」

ライサの慰める言葉に、しかしアイシャはどこか哀しそうに頷いた。

多分あの方と会うのはこれが最後だろう。

……結局、この想いは告げることすら出来なかった。

「アイシャ様……」

ライサが衣装の胸元を掴みながら俯いたアイシャを気遣わしげにのぞき込む。

アイシャはついぞ叶うことのなかった恋の痛みに、いつの間にか涙を流していた。

02 昔語り(1)

「……アイシャはどうしている」

再びライサだけを今度は執務室に呼び出したルドガーは、気がかりそうに眉を寄せて尋ねた。

先程アイシャが自分のきつい言葉で涙を流していたことをルドガーは内心では気に病んでいた。

「今は落ち着いておられます。……後でご心配なさるくらいなら、最初からあのようなことをアイシャ様に申し上げなければいいのですわ。……アイシャ様には突然他国へ嫁ぐ戸惑いもあるでしょうに、その上であのおっしゃりようはあまりにもお可哀想です」
「う……む」

ライサの小言にますますルドガーの秀麗な顔が歪む。

出来れば、こんな時ぐらいいは優しい言葉をかけてやるべきだったかもしれない。

しかし、長年の習性というのは簡単には抜けないものだ。

それに、今回仕方なくアイシャを他の男に渡すことに決めたのもそれに拍車をかけていた。

ルドガーは本当はアイシャのことを愛していた。 それもかなりの長い間。

出来ることならば、アイシャを誰にも渡さずに自分のものにしてしまいたかった。

だがそれは、アイシャ母娘がこの城に現れた時点で、許されないことだと運命づけられていたのだ。

ルドガーは思い返す。

忘れようにも忘れられない、その日のことを。

事の始まりは先王ディラックが城に招いた美貌の踊り子クリステイナに恋をしたことによる。

その当時、ルドガーは十歳だった。

ディラックがクリステイナを第二王妃に据えることに決めると、当然正妃を含む周囲は反対した。

おまけにクリステイナには死別した夫との間に娘がいたのだ。それがアイシャだった。

「卑しい踊り子などを妃に据えるなど、聞いたこともございません！　どうか、陛下お考え直してくださいませ。聞けばあの女には連れ子までいるというではありませんか。陛下は、トウルティエール王家に卑しい血を混ぜるおつもりなのですか！？」

今までディラックは一夫多妻制にも関わらず、今まで他に妃を娶らずにいた。それは確かに彼がオーレリアを愛しているという証でもあった。

そしてその寵愛を一身に受けていたはずの正妃オーレリアは国王ディラックに必死に訴えた。

「……黙りなさい。そなたのそんな言葉は聞きたくない。それに、もうこれは決定したことです」

静かに言うディラックに、オーレリアは愕然とその場に立ち尽くす。

「……第一王妃を部屋に連れて行きなさい。なるべく気を高ぶらせないように」

正妃ではなく、わざとかのような第一王妃という言葉はオーレリアの逆鱗に触れた。

「すべて陛下のせいではありませんか！　わたくしは認めません！　絶対に許しませんわ！」

近衛や侍女に無理引きずられるように連れられながら、オーレリアは絶叫する。

その様子を苦々しい様子で、見つめていたディラックは侍女長に

命じた。

「王と妃の間の扉を全て施錠するように」

それを聞いた者達は思わず息を飲んだ。

それはすなわち、王が正妃を拒絶したも同然ということだ。

「陛下……、それはあまりにもオーレリア様がお気の毒ですわ」

今まで共に国のために尽くしてきたというのに国王のこの仕打ちはあまりに冷酷すぎる。

「オーレリアには正妃という身分がある。それだけで充分でしょう。

……それよりも正妃がクリステイナ達に手を出さぬようによく見張っておくように。あの様子ではかなり不安だ」

「父王っ、母上に対してその仕打ちはあまりにも酷すぎます」

それまで黙って事態を見守っていたルドガーが苦言を呈した。

しかし、それを国王は鼻で笑った。

「まだ成人になるのに年数があるそなたがなにを生意気なことを言いますか。そんなことは政務のことを少しは理解できるようになってから言いなさい」

「……正妃を疎かにして、どこの馬の骨ともしれない女性を寵愛することが政務ですか」

十歳の子供とも思えない大人びた口調でルドガーが正論を言う。

一瞬ディラックは絶句すると、ややして気を取り直したようにルドガーに命令した。

「黙りなさい。いずれおまえに約束された王太子の身分を破棄してもいいのだぞ。……そうすれば、おまえの母は正妃である必要もなくなる」

国王ディラックは、穏やかな口調に隠した牙を血を分けたはずの息子に剥く。

「……あなたは！」

拳を握って王に飛びかかろうとするルドガーを近衛兵達が必死に止めた。

ここでルドガーが王に危害を加えては、この国は本当に後継者がいなくなってしまう。

ディラックは羽交い締めにされるルドガーを冷たく一瞥すると、クリステイナ母娘に用意された部屋へと足を向けた。

それをただ見ているしかできない己の無力さに憤りながら、ルドガーは涙を堪えていた。

「あつ、おうさま！」

「アイシャ」

アイシャがディラックの姿を認めると美しい灰桜色の髪をなびかせて駆け寄っていった。

「そういえば、アイシャ。歳はいくつになりますか」

「七歳です」

ディラックに抱き上げられながら、幼いアイシャは愛らしく答える。

その様子にディラックは相好を崩した。

「そうですか」

成さぬ娘ではあるが、アイシャはとても可愛らしく、いつまでも愛でたくなる。

クリステイナとはあまり似てはいないが、それでも成長すればさぞ美しい姫になることだろう。

「そなたにはいつか、似合いの相手を用意しましょう。……そして、素晴らしい地位も」

その言葉が理解できないアイシャはきょとんとしてディラックを見ている。

「……陛下。わたし達はここには留まらない方が良いのでは。第二王妃の地位など、わたしには過ぎますわ」

楽団の仲間と引き離され、無理矢理に王宮に押し込まれたクリス

ティナがあまりの大事に顔色をなくしている。

ディラックはアイシャを床におろすと、不安げなクリステイナを抱き寄せた。

「わたしはそなたを離しませんよ、クリステイナ。正妃が既にいなければそなたをその座に据えたいところです。いえ、第一王妃をどうにかすればあなたが正妃に出来ますね」

それは正妃をいつ排除しても構わないのだという非情な言葉だった。

「！ そんな、それでは正妃様がお気の毒すぎますわ。お願いですから、二度とそんなことはおっしゃらないでくださいませ」

クリステイナが首を横に振ってディラックに懇願する。

「……あなたがわたしを愛すると誓うのならば、二度と口にはしませんよ、クリステイナ。愛しい人」

二人のただならぬ様子を幼いアイシャが目にして固まっている。

その体をアイシャの侍女のライサが慌てて抱き上げて、別室に連れていった。

「……誓います。ですから、かつての仲間にも、正妃様にも酷いことはなさらないでください」

「分かってくださればよいのです。クリステイナ、愛しています」

これ以上ない程の優しい笑みを浮かべながら、ディラックがクリステイナに口づける。

いわば、クリステイナは仲間達の命と引き替えに無理矢理その地位に就かされた囚われの王妃だった。

そしてクリステイナは己の運命を恨みながら、この王が誓いを守ってくれるのを祈ることしかできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649ba/>

恋詠花

2012年1月1日21時47分発行